

東京外国語大学所蔵「八杉貞利ロシア関係資料群」
デジタルアーカイブ化事業報告書

2026年3月

東京外国語大学文書館

【実施概要】

1. 事業概要	・・・ 3 頁～4 頁
2. 実施状況・成果	・・・ 4 頁～9 頁
3. 総括	・・・ 9 頁
4. その他	・・・ 9 頁

【報告書添付資料】

1. 八杉貞利資料群目録	・・・ 10 頁
2. 企画展パネル	・・・ 11 頁～13 頁
3. 企画展パンフレット	・・・ 14 頁～15 頁

実施概要

1. 事業概要

(1) 事業名称 : 東京外国語大学所蔵「八杉貞利ロシア関係資料群」デジタルアーカイブ化

(2) 事業の目的と概要

本事業は、東京外国語学校のロシア語教授として戦前・戦後におけるロシア語教育をけん引した八杉貞利の日記帳を中心とした「八杉貞利ロシア関係資料群」について、デジタル化および保存修復処置を行うとともに、資料群に含まれる個人情報等の利用制限情報にマスキング処理を施した上で公開を行うことで、利用環境の整備を図ることを目的とする。

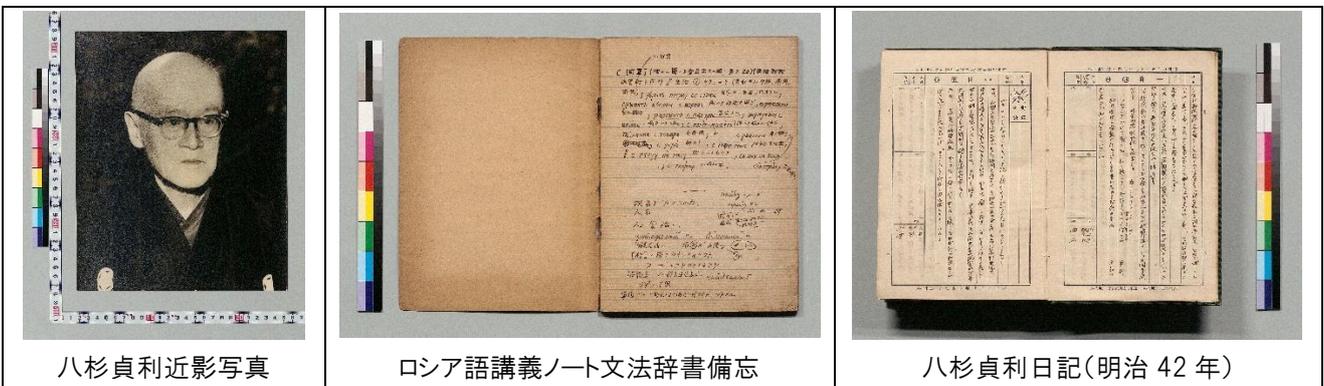
加えて、資料群を用いた企画展および講演会を開催することで、資料群の内容・歴史的価値・利用環境を周知し、利用の一層の促進を図る。

(3) 八杉貞利資料群について

八杉貞利(1876-1966年)は1900年7月東京帝国大学卒業後、恩師上田萬年の指示によりロシア語研究を志し、同年9月東京外国語学校別科に入学した。翌年10月文部省の命によりロシアへ留学し、留学中の1903年に東京外国語学校教授に任命された。日露戦争の勃発に伴い翌年帰国した後、東京外国語学校だけでなく、東京帝国大学や早稲田大学、鉄道院等においても教鞭を執った。1937年3月に東京外国語学校を停年退官した後も、1945年まで非常勤講師として東京外国語学校においてロシア語教育に従事し、1966年2月満89歳で死去した。その間、八杉は『露西亜語学階梯』(大倉書店、1916年)や『露和辞典』(岩波書店、1947年)等を著し、戦前・戦後におけるロシア語教育の第一人者であった。

本資料群は、八杉が東京外国語学校において教鞭を執っていた1908年から没年の前年となる1965年までの日記帳(56点)や、講義ノート・近影写真等(9点)の計65点で構成され、ロシア語教育史の貴重な資料群である。とりわけ、日記帳には、東京外国語大学の前身である東京外国語学校の運営や、八杉が教鞭を執った諸学校での日常が記録されているだけでなく、ロシア・満蒙等の関係者との交流も多く記載され、当時の国際関係・交流を知るうえで貴重な資料群となっている。

画像1_八杉貞利資料群



(4) 具体的な実施事業

本事業では、八杉貞利資料群の保存および利用促進に関する以下の事業を実施した。

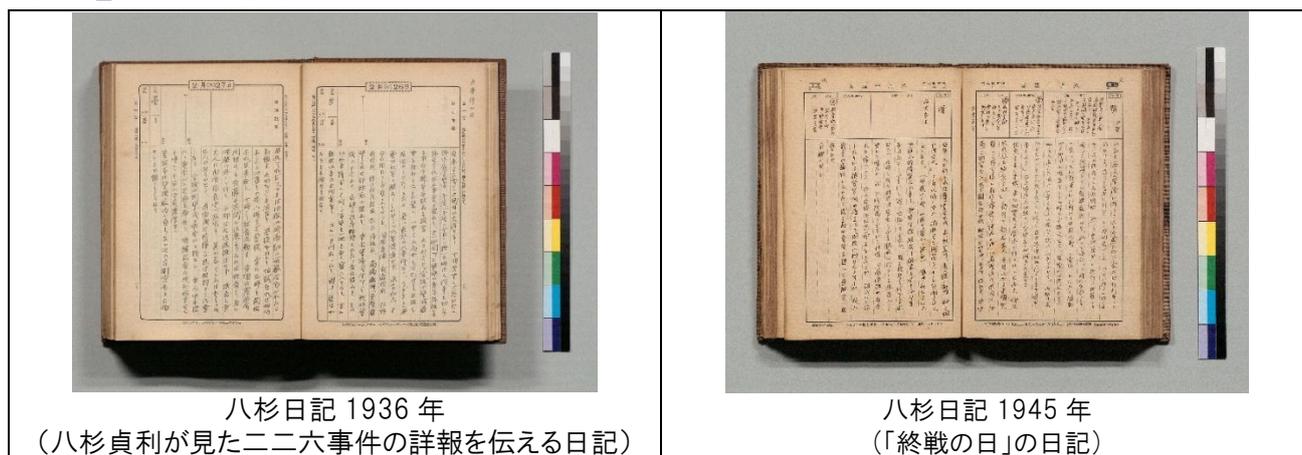
- ①デジタル化
- ②保存修復と脱酸性化処理
- ③画像のマスキング処理とウェブ公開
- ④講演会・企画展の開催
- ⑤報告書等の刊行

2. 実施状況・成果

(1) デジタル化

専門業者に委託のうえ、資料 65 点 (14,489 コマ) をブックスキャニング (カラー400dpi) により撮影し、電子画像データを作製した。画像は TIFF 形式保存用画像、JPEG 形式公開用画像、PDF 形式公開用画像の 3 種類を作製し、撮影時の留意事項および使用するデジタルカメラの条件、ターゲット、スケール、カラーチャートに関する事項や縮率等については、事前に作成した「電子画像データ作製仕様書」の定めに従った。

画像 2 デジタル化画像サンプル



(2) 保存修復と脱酸性化処理

事前調査の結果、本資料群は戦中の日記帳を中心に、①破損(ヒンジ破損等 45 点)、②酸性劣化が進んでおり、現状のまま歴史資料として「永久保存」しながら、利用に供することが困難である。とくに破損資料のうち 24 点に、本紙の「破れ」・「欠損」、綴じ・製本に「ヒンジ破損」・「製本分解」・「表紙欠損」・「背表紙欠損」等の著しい破損が生じており、破れや亀裂に対する繕いと損傷箇所の補強等の保存処置を実施した。

また資料群は程度の差はあるものの、全て酸性紙であり、とくに 1940 年代の日記帳を中心に酸性劣化が進み、本紙が非常に脆弱になっていた。また事前調査の結果、脱酸性化処理によりインクや染料に変色・褪色の恐れがある青図・青焼き・湿式コピー・こんにやく版等が含まれていないことが確認できたことから、資料群全体に対して脱酸性化処理を実施した。

なお保存修復と脱酸性化処理については、専門業者に委託のうえ実施した。

(3) 画像のマスキング処理と一部公開

デジタル化および保存修復・脱酸性化処理により、八杉貞利資料群については、資料保存と閲覧を並行して行う環境が整った。これにより 2026 年 3 月目録を公開し、閲覧に供することとなった。なお資料閲覧は、資料保存の観点から原則として複製物であるデジタル画像を用いて行うことになるが、デジタル画像では確認できない情報の確認など理由があれば、原本での利用も可能である。

利用環境が整備された一方で、資料群のうち日記帳には、多数の利用制限情報が含まれている。資料群の閲覧利用については「国立大学法人東京外国語大学文書館における特定歴史公文書等の利用請求に対する利用決定に係る審査基準」に沿って「時の経過」を考慮しつつ、主に表 1 の「30 年を経過した特定歴史公文書等に記録されている個人情報について」に記載利用制限情報に該当する項目を中心に利用審査を行い、「全部利用」・「一部利用」・「全部利用制限」を決定する必要がある。

本事業では撮影した電子画像データを用いて、東京外国語大学文書館のアーキビストが利用制限情報に該当する箇所の確認を行い、その一部について作業員が該当箇所のマスキング処理(黒塗り)を進めた。その全てが完了したわけではないが、閲覧審査およびマスキング処理が完了した一部資料については、後述のウェブ企画展等により資料紹介を兼ね公開するとともに、閲覧に供した。

利用審査の結果、日記には、本人や家族の「伝染性の疾病、身体の障害その他の健康状態」、「財産又は所得」、「学歴又は職歴」、「学業成績又は処分」や、東京外国語学校の生徒の「学歴又は職歴」、「学業成績又は処分」や同僚の「採用、選考又は任免」に関する情報などが多数含まれていた。一例を挙げると、八杉日記 1919 年には、いわゆるスペイン風邪の流行期(1918-1920 年)を反映して、本人や家族が日記中には「発熱」、「加答児(カタル)」、「気管支炎」、「肺炎」といった表現が数多く存在し、「伝染性の疾病、身体の障害その他の健康状態」に該当する項目が多数存在した。本日記の場合、すでに 100 年の「時の経過」を経ているものの、利用に際しては留意が必要である。

また一部資料の利用審査に当たっては、電子画像データを OCR(光学文字認識)処理したうえで、生成 AI に表 1 に該当する項目の有無を検証し、利用審査の参考とした。

表 1_「30 年を経過した特定歴史公文書等に記録されている個人情報について」

特定歴史公文書等に記録されている情報	一定の期間(目安)	該当する可能性のある情報の種類の例
個人情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	50年	イ 学歴又は職歴 ロ 財産又は所得 ハ 採用、選考又は任免 ニ 勤務評定又は服務 ホ 学業成績又は処分 ヘ 人事記録
重要な個人情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	80年	イ 国籍、人種又は民族 ロ 家族、親族又は婚姻 ハ 信仰 ニ 思想 ホ 伝染性の疾病、身体の障害その他の健康状態 ヘ 刑法等の犯罪歴(罰金以下の刑)
重要な個人情報であって、一定の期間は、当該情報を公にすることにより、当該個人又はその遺族の権利利益を害するおそれがあると認められるもの	110年を超える適切な年	イ 刑法等の犯罪歴(禁錮以上の刑) ロ 重篤な遺伝性の疾病、精神の障害その他の健康状態

(4) 講演会・企画展の開催

資料群の利用促進を念頭に、資料群の内容・歴史的価値、整備された利用環境を周知するため、以下の企画展・ウェブ企画展・講演会を開催した。

①企画展の開催

《基本情報》

- ・ 題目：「八杉貞利と東京外国語学校」
- ・ 日時：2026年1月9日～4月上旬
- ・ 場所：附属図書館1階（大学文書館展示場）

《展示構成》

展示は画像3「展示見取り図」の通り、展示パネル8枚（吊り下げ、①～⑧）および展示ケース4架（90cm×180cm、A～D）により構成した。パネルおよび各展示ケースの概要は表2・表3の通りである。また展示パンフレット（A4サイズ・8ページ・2つ折り・1000部）を作成し、展示場で配布した。なお展示パネル・展示パンフレットについては巻末の「報告書添付資料」に掲載した。

図3_展示見取り図

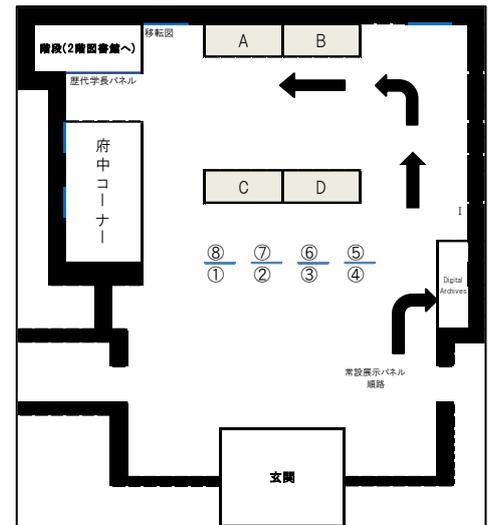


表2_展示パネルの概要

	テーマ	掲載画像
1	I 八杉貞利の誕生と進学	1912年頃八杉貞利写真、晩年八杉貞利写真【八杉貞利資料群】
2	II ロシア語研究とロシア留学	東京外国語学校歴代校長
3	III 東京外国語学校教授就任	1916年ロシア語学科集合写真【八杉貞利資料群】
4	IV ロシア語授業と業績	八杉貞利授業ノート写真【八杉貞利資料群】
5	V 名誉教授の名称授与と褒章	公文書「八杉貞利東京外国語学校名誉教授ノ名称ヲ授クルノ件(昭和12年5月21日)」(国立公文書館所蔵)
6	VI 附属図書館 八杉文庫	八杉文庫目録写真
7	VII 八杉貞利の日記	(文章のみ)
8	VIII 八杉貞利の生涯と業績	1912年頃八杉貞利写真、研究業績一覧、生涯年表

表3_展示ケース概要

	テーマ	概要
A	日記にみる八杉貞利と東京外国語学校(1)	小パネル「ロシア領沿海州旅行の準備」(1912年8月19日、8月11日・8月13日・8月16日・8月20日・8月22日・9月20日、8月16日官報)、小パネル「沿海州・シベリア・満蒙旅行」・小パネル「東京外国語学校と軍事通訳養成」(1919年9月5日、1925年8月19日レニングラードからの葉書)
B	日記にみる八杉貞利と東京外国語学校(2)	1909年4月14日「ドロヴィチ氏の到着」、1916年日記「五六月修学旅行・絵葉書」、小パネル「日記にみる停年退官と名誉教授就任」(1937年5月27日、3月31日、名誉教授名称変更パネル)、1958年4月17日「辞書編纂」、八杉貞利肖像写真(晩年)、講義ノート
C	日記にみる大事件(1)	1912年8月1日「明治天皇崩御・タイプライターの使用」、小パネル「第一次世界大戦」(1914年3月17日「ロシア革命」(11月7日は記載無し)、7月29日・8月23日・9月5日、1919年6月28日講和条約締結)、1931年9月18日「満洲事変」、小パネル「大事件の日 二二六事件」(1936年2月26日-29日)
D	日記にみる大事件(2)	小パネル「太平洋戦争」(1941年12月8日-10日「日米開戦の日」、1942年2月15日「シンガポール陥落」、1945年8月15日「終戦の日」、3月9日-10日「東京大空襲」、1945年8月9日-10日「原爆とソ連侵攻」、シンガポール陥落の写真)

《展示風景》



展示全体 1 (展示パネル)



展示全体 2



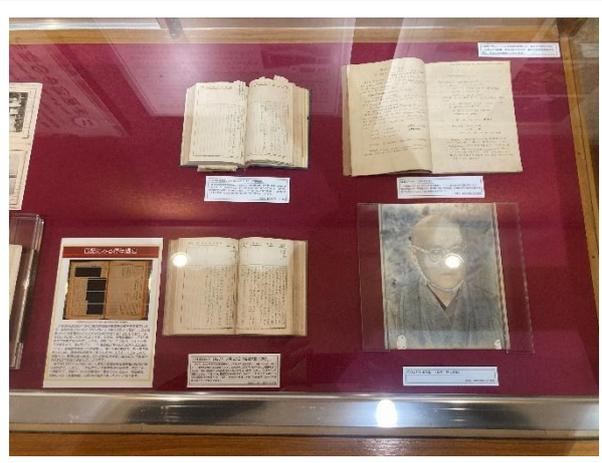
展示ケース A・B



展示ケース C・D



展示した日記



展示した肖像写真・講義ノート

②ウェブ企画展

《基本情報》

- ・ 題目：Web 企画展「八杉貞利と東京外国語学校」
- ・ 公開日：2026年1月19日
- ・ URL：大学文書館ウェブサイト特設ページ

(https://www.tufts.ac.jp/common/archives/exhibition_yasugi.html)

《展示構成》

企画展の内容を踏まえたウェブ企画展を大学文書館ウェブサイト上において開催した。

- I 東京帝国大学における博言学の研究と東京外国語学校への着任
- II 八杉貞利の研究業績
- III 八杉貞利資料群について

《ウェブ企画展の画像》



③講演会

《基本情報》

- ・ 開催日時：2026年1月14日(水) 12:40~14:10（3時限目 授業内講演）
- ・ 場所：東京外国語大学研究講義棟102教室
- ・ 講演者：渡辺雅司氏（東京外国語大学名誉教授）
- ・ 題目：「東京外国語学校露語科と虚無党精神」
- ・ 備考：

《実施状況》

世界教養科目「近代日本のなかの東京外国語大学」の授業内講演として、ハイブリッド形式（対面・オンライン）で開催し、参加者は対面 63 名、オンライン（Zoom）8 名であった。

《当日の様子》



講演会の様子 1



講演会の様子 2

(5) 報告書等の刊行

本実施報告書を作成し、大学文書館ウェブページ上に掲載した。

3. 総括

本事業を通じて、八杉貞利資料群のデジタル化及び保存修復・脱酸性化処理が完了した。これにより、原則として原本を保存したまま、複製物であるデジタル画像を閲覧に供せることとなり、歴史資料の保存と利用を両立させる環境が整った。実際、目録公開以降、電子画像データを利用した閲覧利用が進んでいる。

また講演会や企画展を開催したことによる利用促進の効果も表れている。例えば、講演会には、受講者数を上回る参加者がおり、本学在校生だけでなく、ロシア関係の研究者の参加も見られ、関係者に八杉貞利資料群の存在を周知する機会となった。また企画展の開催が、企画展で紹介した八杉日記を中心に、資料に関する問い合わせ及び利用請求（閲覧）も増えており、一定の利用促進の効果があったと言える。

今後、八杉貞利資料群に関するウェブ企画展の拡充や授業等での紹介を増やし、利用の促進を図っていく予定である。

4. その他

東京外国語大学所蔵「八杉貞利ロシア関係資料群」デジタルアーカイブ化事業は公益財団法人図書館振興財団の2025年度振興助成を受けて実施しました。

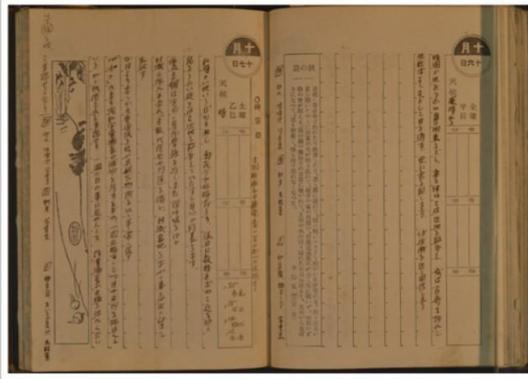
報告書添付資料

1. 八杉貞利資料群目録

資料番号	資料名	作成者	年代	形態
八杉-1	[写真](八杉貞利近影写真)			写真
八杉-2	(ロシア語講義ノート)			冊子
八杉-3	(ロシア語講義ノート)文法辞書備忘			冊子
八杉-4	(日本語講義ノート)日本語初級			冊子
八杉-5	(日本語講義ノート)			冊子
八杉-6	(講義ノート)			冊子
八杉-7	(ロシア語講義ノート)早稲田講義		1947年	冊子
八杉-8	後藤子爵訪露随行日誌 附雑感	日露協会 關根齊一	1927年	綴
八杉-9	(八杉貞利日記明治41年)「明治四十一年日記」		1908年	冊子
八杉-10	(明治42年日記)		1909年	冊子
八杉-11	(明治43年日記)		1910年	冊子
八杉-12	(明治44年日記)		1911年	冊子
八杉-13	(明治44年日記)		1911年	冊子
八杉-14	(明治45年日記)		1912年	冊子
八杉-15	(大正3年日記)		1914年	冊子
八杉-16	(大正4年日記)		1915年	冊子
八杉-17	(大正5年日記)		1916年	冊子
八杉-18	(大正6年日記)		1917年	冊子
八杉-19	(大正7年日記)		1918年	冊子
八杉-20	(大正8年日記)		1919年	冊子
八杉-21	(大正9年日記)		1920年	冊子
八杉-22	(大正10年日記)		1921年	冊子
八杉-23	(1924年日記)		1924年	冊子
八杉-24	(紀元二五八五當用日記)		1925年	冊子
八杉-25	(紀元二五八六當用日記)		1926年	冊子
八杉-26	(紀元二五八七當用日記)		1927年	冊子
八杉-27	(ライオン當用日記 2589)		1929年	冊子
八杉-28	(ライオン當用日記 2590)		1930年	冊子
八杉-29	(ライオン當用日記 2591)		1931年	冊子
八杉-30	(ライオン當用日記 2592)		1932年	冊子
八杉-31	(ライオン當用日記 2593)		1933年	冊子
八杉-32	(1935年日記)		1935年	冊子
八杉-33	(ライオン當用日記 2596)		1936年	冊子
八杉-34	(昭和十二年當用日記)		1937年	冊子
八杉-35	(昭和十三年當用日記 2598)		1938年	冊子
八杉-36	(昭和十四年當用日記 2599)		1939年	冊子
八杉-37	(昭和十五年當用日記)		1940年	冊子
八杉-38	(昭和十六年當用日記)		1941年	冊子
八杉-39	(昭和十七年當用日記)		1942年	冊子
八杉-40	(昭和十八年當用日記)		1943年	冊子
八杉-41	昭和十九年日記A		1944年	冊子
八杉-42	昭和十九年日記B		1944年	冊子
八杉-43	昭和二十年當用日記		1945年	冊子
八杉-44	昭和廿一年日記下		1946年	冊子
八杉-45	昭和廿一年日記上		1946年	冊子
八杉-46	昭和二十二年自由日記		1947年	冊子
八杉-47	日記 昭和二十三年 1948[子]		1948年	冊子
八杉-48	昭和24年自由日記		1949年	冊子
八杉-49	昭和廿五年當用日記		1950年	冊子
八杉-50	昭和廿六年當用日記		1951年	冊子
八杉-51	昭和廿七年當用日記		1952年	冊子
八杉-52	昭和廿八年當用日記		1953年	冊子
八杉-53	當用日記昭和29年		1954年	冊子
八杉-54	昭和三十季當用日記		1955年	冊子
八杉-55	昭和卅一年當用日記		1956年	冊子
八杉-56	昭和卅二季當用日記		1957年	冊子
八杉-57	昭和卅三季當用日記		1958年	冊子
八杉-58	昭和卅四季當用日記		1959年	冊子
八杉-59	昭和卅五季當用日記		1960年	冊子
八杉-60	昭和卅六季當用日記		1961年	冊子
八杉-61	昭和卅七季當用日記		1962年	冊子
八杉-62	昭和卅八季當用日記		1963年	冊子
八杉-63	昭和卅九季當用日記		1964年	冊子
八杉-64	昭和四十季當用日記		1965年	冊子

2. 企画展パネル

【表紙、パネル①～③】



八杉貞利日記に見る東京外国語学校

八杉貞利はロシア留学中の1903年に東京外国語学校露語科教授に着任し、翌年日露戦争の勃発に伴い帰国し、1945年まで同校で教鞭を執りました。大学文書館では八杉貞利の遺した日記・ノート等の資料群の寄贈を受け、その整理を進めています。本企画展では、八杉日記に描かれた明治・大正・昭和の東京外国語学校の様子を紹介します。

◇日時：2026年1月9日～4月上旬

◇場所：東京外国語大学附属図書館1階ギャラリースペース



東京外国語大学アクセス
●バス路線「丸の内線」三軒茶屋駅下車徒歩10分
●徒歩ルート「丸の内線」三軒茶屋駅より徒歩10分
●徒歩ルート「丸の内線」三軒茶屋駅より徒歩10分
●徒歩ルート「丸の内線」三軒茶屋駅より徒歩10分
●徒歩ルート「丸の内線」三軒茶屋駅より徒歩10分



八杉貞利（やぎ まさひろ、1876-1966年）
ロシア語学。1876年明治9年9月東京浅草に生まれる。高等師範学校附属小学校、同中学校、第一高等学校を経て、1900年東京帝国大学文科大学露語科に露語科に転科し入学し、1900年7月恩賜の銀時計を受けて卒業。翌年東京帝国大学文科大学露語科に入学し、同年9月東京外国語学校教授に就任。翌年10月大正帝の命によりロシア留学。1903年より東京外国語学校教授に就任。翌年帰国。東京帝国大学文科大学露語科、専攻院等においても教鞭を執る。1937年3月の専攻院退任後、1945年まで専攻院講師として東京外国語学校においてロシア語教授に就任。1956年2月、高松で死去。

I 八杉貞利の誕生と進学



【写真】八杉貞利肖像写真（左）1912年頃（右）晩年（年代不詳）

八杉貞利は、1876年(明治9年)9月16日に八杉利雄と春子の次男として東京浅草に生まれました。八杉家は石州津和野藩(現：島根県)の藩医の家柄で、父利雄は陸軍軍医でした。

高等師範学校附属小学校、同中学校、第一高等学校を経て、1897年東京帝国大学文科大学博言学科(後に言語学科と改称)に入学し、1900年7月恩賜の銀時計を受けて卒業します。

大学時代には言語学に関する訳書・論文の執筆を進め、言語学会の設立や『言語学雑誌』の創刊にも携わる一方、上田萬年に師事しアイヌ語研究に没頭します。その論文「アイヌ語断片」は高い評価を受けています。



II ロシア語研究とロシア留学



【写真】東京外国語学校歴代校長。八杉の師、上田万高年は二代代校長(事務取扱)を兼務していました。

1900年9月、東京外国語学校校長事務取扱でもあった恩師、上田の指示により、八杉はロシア語研究に進むことを決意し、東京外国語学校露語科別科に入学します。八杉が入学した露語科では二葉亭四迷が教鞭を執っていました。

翌年10月文部省からロシア留学を命じられ、マルセイユ、ベルリン、ワルシャワを経由し、12月ペテルブルクに到着します。後年の八杉の回想によると、「ロシア留学中はペテルブルク大学の自由聴講生にして貰って言語学概説を聴講し」、印欧語学の大家ポドゥエン・ド・クルテナー教授の私的な勉強会にも参加していたようです。



III 東京外国語学校受給受給

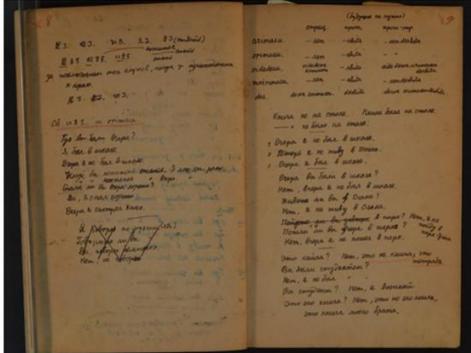


モットセロイ、平妻宛木館、津貞利八杉の自筆の目録、辞書部でロシア語【真1】

八杉貞利は、1876年(明治9年)9月16日に八杉利雄と春子の次男として東京浅草に生まれました。八杉家は石州津和野藩(現：島根県)の藩医の家柄で、父利雄は陸軍軍医でした。高等師範学校附属小学校、同中学校、第一高等学校を経て、1897年東京帝国大学文科大学博言学科(後に言語学科と改称)に入学し、1900年7月恩賜の銀時計を受けて卒業します。大学時代には言語学に関する訳書・論文の執筆を進め、言語学会の設立や『言語学雑誌』の創刊にも携わる一方、上田萬年に師事しアイヌ語研究に没頭します。その論文「アイヌ語断片」は高い評価を受けています。



Ⅳ ロシア語授業と業績



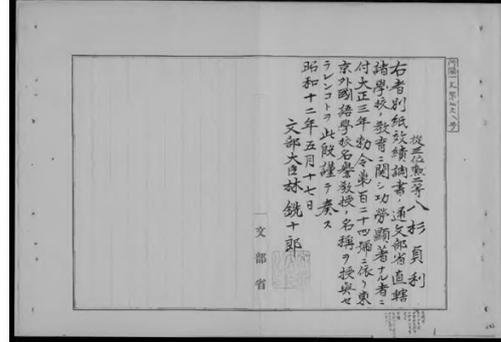
【写真】八杉授業ノート

八杉の授業は、講読したテキストを次の講義において生徒に暗誦させるもので、在任中継続して実施されました。八杉は体系的なロシア語教授法の確立を進め、1916年に出版された『露西亜語学階梯』は「発行以来三十余年間わが国における唯一の体系的なロシア語教科書」となりました。

また辞書の編纂にも尽力し、1919年には同僚であった鈴木於菟平らと共同してアレクサンドロフの露英辞典を和訳し、『新譯露和大辞典』を出版します。その後1935年に出版した『右空露和辞典』は、見出し語・例文も豊富で出版後20余年で81,600部を上るなど、ロシア語学習・研究には欠かせない辞書となりました。



Ⅴ 名誉教授の名称授与と褒章



【写真】公文書「八杉貞利東京外国語学校名誉教授ノ名称ヲ授クルノ件(昭和12年5月21日)」(国立公文書館所蔵)

1937年停年退職した八杉は、「文部省直轄諸学校ノ教育ニ関シ功勞顯著ナル者」として「東京外国語学校名誉教授」の名称を授与されます。戦後1950年に日本ロシア文学会が創立されると、八杉は会長に推され、ロシア語の普及・ソヴィエト研究の発展に貢献しました。

1960年、八杉は80歳を超えてなお辞書編纂に尽力し、『右波ロシア語辞典』を出版します。翌年には朝日新聞社より朝日文化賞を、1964年にはソヴェト連邦レニングラード大学より名誉博士の称号を受け、1965年にはロシア語研究の進展に寄与した功勞により銀盃一組を下賜されます。

そして1966年2月、脳軟化症のため満89歳で死去しました。

Ⅵ 附属図書館 八杉文庫



八杉貞利の蔵書は、その死後東京外国語大学に寄贈され、現在「八杉文庫」として図書館に収められています。『八杉文庫目録』(昭和48年10月、東京外国語大学附属図書館発行)には八杉の教え子で当時東京外国語学校の図書館長を務めた和久利誓一の序文があり、寄贈の経緯が以下のように紹介されています。

「先生の御逝去後、その御蔵書約941冊がご遺族から本学図書館に寄贈された。先生の御蔵書は、太平洋戦争末期、麻布霞町の御自宅に置かれたものはもちろん、八王子に疎開されたものまでも空襲によって焼失した。御寄贈を受けたのは、主として北軽井沢に疎開されていたものであるが、先生が戦後入手されたものも相当数に上っている。

本図書館では、これを別置して「八杉文庫」とし、先生の御業績と、本学と先生との深い由縁を永久に記念することとした」

Ⅶ 八杉貞利の日記

八杉貞利は、日々丹念に欠かさず日記をつけていました。本学文庫館に寄贈された資料群には1908年から1965年までの日記が含まれ、明治から昭和の激動の時代を生きた八杉の日常がつつられています。八杉の教え子である和久利誓一によれば、「先生は、きわめてきちょうめんなご性格で、日記も少年時代から死の半年ぐらい前まで、一日として欠かされることがなかった」(『ろしや路』Ⅷ頁)そうです。

なお八杉の日記のうち一部については既に雑誌・書籍等で紹介されています。八杉が17歳の時に郷里津和野を訪れた際、小さな手帳に記した日記が死後1周年を記念して『故山日記』(1967年2月)として出版されたほか、帝国大学時代の生活が『縣居日記』という名の手帳5冊にまとめられ、その一部が雑誌『文学』(1966年4月号)で紹介されています。特に後者は、当時の帝国大学博言学科に学ぶ学生の勤勉さを知らしめる資料となっています。

また八杉は東京外国語学校教授時代にも、ロシア・ソ連をたびたび訪問しており、その渡航記は「当時のロシアおよび日本の社会事情を伝える点で社会的意義あるもの」として、八杉の教え子である和久利誓一の監修のもと、『ろしや路』(1967年6月30日、図書新聞社)として刊行されました。

同書には以下の渡航記が収められ、その詳細な記録は当時の世情を伝える貴重な歴史資料となっています。

- ・満韓沿海州紀行1冊：1912年8月26日-9月4日ロシア領沿海州への出張記録。
- ・貝加爾日記3冊：1919年7月9日-8月31日バイカル湖沿岸、シベリアへの出張記録。
- ・金角日記2冊：1920年7月28日-9月4日ウラジオストク金角湾、沿海州への出張記録。
- ・国島日記5冊：1921年7月15日-8月28日ニコラエフスク周辺への出張記録。
- ・ドニエプク(後藤子爵随訪ソ日記)2冊：1927年12月5日-2月3日の後藤新平の訪ソに随行した際の記録。後藤-スターリン会見に同席。
- ・オハ紀行(北樺太石油鉱区旅行)1冊：1931年8月5日から8月25日の北樺太への出張記録。

これらの既刊の渡航記はノート等にまとめられ、今回寄贈された日記にはその内容は含まれませんが、渡航前後の記録からは、大正・昭和初期における旅支度の苦労が伺えます。

VIII 八杉貞利の生涯と業績

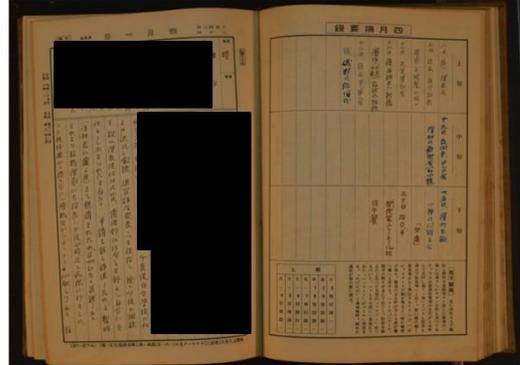


【写真】八杉貞利肖像写真

年代	著作
1899年	「フランツ・ポップの生涯と学統」(『言語学雑誌』第1巻第1号)
	スウィート「英語の発音的研究」(『言語学雑誌』第1巻第2号)
1900年	「アイヌ語彙科」(『言語学雑誌』第1巻第6号)
1901年	「ストロング氏言語史綱要」(東京専門学校出版部)
1905年	「語言ブーシェン」(時代要聞社)
1916年	「露語の起源問題」(韓文堂『露語研究』所収、同文館)
1932年	「新発音ロシヤ語法本」(大東書店)
	「露和辞書」(岩波書店)
1935年	「ソヴエト連邦の言語の発展について」(『露州博士学術論文集』所収、岩波書店)
1936年	「ロシヤ文学史」(志の原社)、『世界文壇大辞典』第7巻所収
	「露西言語学論」(共著、太田文)
1937年	「日露言語と作文」(白水社)
1939年	「ロシヤ語法本」(同済社)
	「ロシヤ語法本」(同済社)
1941年	「露西言語学」(大東書店)
1943年	「初等ロシヤ語法本」(大東書店)
1947年	「ロシヤ語法本」(同済社)
1948年	「露語の起源」(新訳、世界文学社)
1953年	「ロシヤ語法」(共著、岩波書店)
1959年	「初等ロシヤ語法」(大東書店)
1960年	「露西言語学」(同済社)
1961年	「ロシヤ語法」(同済社)
1966年	「ロシヤ語法」(同済社)
1969年	「露西言語学」(同済社)

略歴	概要
1876年	9月16日、八杉利雄・春子の次男として東京浅草で生れる。母春子は産後肥立悪く同年10月1日18歳で死去。父利雄は明治16年37歳で死去。当時幕本皮膚病院長、陸軍一等軍医。母死去の後母の弟に育てられる。
1897年	第一高等学校卒業。同年東京帝国大学文科大書言語学科入学。指導教官、文学博士上田萬年先生の指示によりロシヤ語学の研究に入る。
1900年	東京帝国大学卒業。恩賜の銀時計を受ける。
1901年	名美子(海軍少将岩崎達人長女)と結婚。文部省より露語研究のため露国へ留学を命ぜられる。11月出発。
1903年	東京外国語学校教授に任ぜられる。
1904年	露国より帰国。東京帝国大学文学部、早稲田大学講師を兼職。
1924年	アカデミー二百年祭に招かれ訪露。
1927年	ソヴエト連邦へ後藤新平氏と共に渡る。スターリン氏と会談。
1937年	東京外国語学校名誉教授となる。
1951年	日本ロシヤ文学会創立され会長に就任。
1960年	若波ロシヤ語辞典完成。業績褒章を受ける。
1961年	朝日新聞社より朝日文化員を受ける。
1964年	ソヴエト連邦シベリアからシベリアに出兵している最中であり、陸軍の護衛のもと、ウラジオストク、ノルピン、チチハル、満洲里、チタ、ノルピン、大連を廻りました。この時の八杉の渡航記は、『ろしや路』(昭和42年6月30日、図書新聞社)に「貝加爾日記」(バイカル日記)として収められています。
1965年	ロシヤ語学の研究、普及に努め、我国学術の進展に寄与した功により銀盃一組を下賜される。
1966年	2月、脳軟化症のため満89歳で死去。

日記に見る停年退官



【写真】八杉日記1937年4月1日 ※個人情報のため一部黒塗り

八杉貞利は1937年3月に東京外国語学校教授の職を停年退官します。退官発表が行われた3月31日には「学校庶務より電話にて退官発表された旨通知ありたるが本日は行かざりき」と記しており、退官日には出校しなかったようです。その後、非常勤講師として1945年まで勤務するからでしょうか。退官に対して「淡泊」であった様子が伺えます。翌4月1日に、「午食後自分学校に行き戸沢氏二面語(ママ)。退官辞令発表につき挨拶し、種々今後の相談す。教員課長後任は片山氏、露語部は松田を主幹とし自分に主任として止まられたき旨たり。事情を話し辞退したれど暫時(津村君に譲る迄)とて懇請されたればやむなく承諾した」ようです。

また5月27日には八杉に対して東京外国語学校名誉教授の名称が付与されます。しかし、「本日やつと名誉教授辞令受領す。五月二十一日附にて、印形一つもなき無造作に驚きたり」とあり、時節柄を反映してか「名誉教授」の辞令が簡素であったことが伺えます。

1919年バイカル修学旅行



【写真】1919年7月10日 東京外国語学校旅行団

東京外国語学校露語科では、1910年7月10日から8月6日に露語科教授であった鈴木於菟平の引率のもと、生徒14名が沿海州への修学旅行を実施しました。これを皮切りに、露語科生徒たちはシベリア・満蒙を度々訪問します。

1919年にも鈴木、八杉両教授の引率のもと、7月9日から8月31日の2ヶ月弱にわたり27名の生徒がシベリア修学旅行に向かいました。当時はロシア革命から2年、いまだ日本などがシベリアに出兵している最中であり、陸軍の護衛のもと、ウラジオストク、ノルピン、チチハル、満洲里、チタ、ノルピン、大連を廻りました。この時の八杉の渡航記は、『ろしや路』(昭和42年6月30日、図書新聞社)に「貝加爾日記」(バイカル日記)として収められています。

旅先では、多くの学生が腹痛に悩まされた一方で、訪問した各地において外交官・商社員・軍部通訳・教師などとして活躍する卒業生より歓迎を受けました。八杉の日記によると、渡航後の9月5日に開催された教官会議では、旅行時の教訓として、「大旅行出発前、健康診断の必要、所在卒業生に通知の必要」を主張したそうです。

東京外国語学校と軍事通訳養成



【写真】陸軍依託生

日露戦争勃発直前の1904年1月、東京外国語学校は陸海軍より露清韓語通訳の依頼を受け、本校規則を改正し軍事通訳従事者のための制度を設けます。そして、露清韓語の卒業試験の繰り上げ、露清語の講習会、軍事通訳による休学認可、捕虜収容所への通訳としての学生派遣などの軍事協力を行いました。日露戦争後も、露清韓語の需要増加に合わせ、1906年には露・清・韓語を1年で修学させる速成科を設置します。翌年にはこの速成科は廃止されますが、1908年(明治41)に、陸軍は「外国語奨励規則」(陸達40号)を設け、試験合格者を陸軍軍人休暇規則により外国へ語学研究に派遣する制度を、海軍は海軍大学校条例改正により海軍大学校選科に語学選修の過程を設けることとなり、日露戦争以後、陸海軍は語学の重要性を明確に意識して行きます。そして、同年10月海軍省達130号において、海軍は外国語学校に委託して専攻語学を修学させることが定められ、他方陸軍も1915年(大正4年)に陸達16号による外国語学奨励規則の改正により、外国語学校への依託学生の派遣を正式に決定します。これにより、陸海軍の学生らが東京外国語学校において、学生に混ざって語学を学ぶ状況が生まれました。なお、こうした規則整備以前からも余剰を利用して、東京外国語学校の専修科・速成科で学ぶ将校は数多く存在していました。

八杉日記によると、1919年のシベリア出兵に際しても「陸軍省より照会につき露語生徒数名を在学のまゝ陸軍通訳とし西伯利にやる可否につき討論」があったそうです。しかし、この時、八杉は可を主張したそうですが不賛成が多く、此内に陸軍省より中止の旨申来りしめて此の議も中止したそうです。

3. 企画展パンフレット

東京外国語大学文書館所蔵 八杉貞利資料目録

資料番号	資料名	西暦	形態
1	[写真]八杉貞利(彩色写真)		写真
2	[複製ノート]		冊子
3	[ノート]文法辞書編纂		冊子
4	[ノート]日本語初級		冊子
5	[日本語初級ノート]		冊子
6	[複製ノート]		冊子
7	[ノート]原稿用紙	1947年	冊子
8	集録子爵松尾藩行日記 判録巻	1927年	巻
9	明治41年日記	1908年	冊子
10	明治42年日記	1909年	冊子
11	明治43年日記	1910年	冊子
12	明治44年日記	1911年	冊子
13	明治45年日記	1912年	冊子
14	明治46年日記	1913年	冊子
15	明治47年日記	1914年	冊子
16	明治48年日記	1915年	冊子
17	明治49年日記	1916年	冊子
18	明治50年日記	1917年	冊子
19	明治51年日記	1918年	冊子
20	明治52年日記	1919年	冊子
21	明治53年日記	1920年	冊子
22	明治54年日記	1921年	冊子
23	明治55年日記	1922年	冊子
24	明治56年日記	1923年	冊子
25	明治57年日記	1924年	冊子
26	明治58年日記	1925年	冊子
27	明治59年日記	1926年	冊子
28	明治60年日記	1927年	冊子
29	明治61年日記	1928年	冊子
30	明治62年日記	1929年	冊子
31	明治63年日記	1930年	冊子
32	明治64年日記	1931年	冊子
33	明治65年日記	1932年	冊子
34	明治66年日記	1933年	冊子
35	明治67年日記	1934年	冊子
36	明治68年日記	1935年	冊子
37	明治69年日記	1936年	冊子
38	明治70年日記	1937年	冊子
39	明治71年日記	1938年	冊子
40	明治72年日記	1939年	冊子
41	明治73年日記	1940年	冊子
42	明治74年日記	1941年	冊子
43	明治75年日記	1942年	冊子
44	明治76年日記	1943年	冊子
45	明治77年日記	1944年	冊子
46	明治78年日記	1945年	冊子
47	明治79年日記	1946年	冊子
48	明治80年日記	1947年	冊子
49	明治81年日記	1948年	冊子
50	明治82年日記	1949年	冊子
51	明治83年日記	1950年	冊子
52	明治84年日記	1951年	冊子
53	明治85年日記	1952年	冊子
54	明治86年日記	1953年	冊子
55	明治87年日記	1954年	冊子
56	明治88年日記	1955年	冊子
57	明治89年日記	1956年	冊子
58	明治90年日記	1957年	冊子
59	明治91年日記	1958年	冊子
60	明治92年日記	1959年	冊子
61	明治93年日記	1960年	冊子
62	明治94年日記	1961年	冊子

八杉日記 1944年6月25日-26日

東京外国語大学文書館

東京外国語大学文書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟600号室
TEL.042-330-5842
http://www.nufs.ac.jp/common/archives/

1 八杉貞利と東京外国語学校 (1876-1966年)

(1) 東京帝国大学における博言学の研究と東京外国語学校への着任

八杉貞利は、1876年(明治9年)9月16日に八杉利雄と妻子の次男として東京浅草に生まれました。八杉利雄は石州津和野藩(現:島根県)の藩医の家系で、父利雄は陸軍軍医でした。高等師範学校附属小学校、同中学校、第一高等学校を経て、1897年東京帝国大学文学部文学科(後に言語学と改称)に入学し、1900年7月恩賜の留学期間を受けて卒業します。大学在学中は言語学に関する訳書・論文の執筆を進め、言語学会の設立やアイヌ語研究に没頭し、1901年『言語学雑誌』には上田に帯同して北海道を調査した記録を載せた『アイヌ断片』などの論考が掲載されています。

東京帝国大学卒業後、八杉は言語研究をテーマに大学院へと進学します。当時東京外国語学校校長事務取扱を務めていた上田正二郎(現東京外国語大学名誉教授)と知り合い、1903年3月より東京帝国大学文学部文学科(後に言語学と改称)に入学し、1900年7月恩賜の留学期間を受けて卒業します。大学在学中は言語学に関する訳書・論文の執筆を進め、言語学会の設立やアイヌ語研究に没頭し、1901年『言語学雑誌』には上田に帯同して北海道を調査した記録を載せた『アイヌ断片』などの論考が掲載されています。

東京帝国大学卒業後、八杉は言語研究をテーマに大学院へと進学します。当時東京外国語学校校長事務取扱を務めていた上田正二郎(現東京外国語大学名誉教授)と知り合い、1903年3月より東京帝国大学文学部文学科(後に言語学と改称)に入学し、1900年7月恩賜の留学期間を受けて卒業します。大学在学中は言語学に関する訳書・論文の執筆を進め、言語学会の設立やアイヌ語研究に没頭し、1901年『言語学雑誌』には上田に帯同して北海道を調査した記録を載せた『アイヌ断片』などの論考が掲載されています。

(2) 八杉貞利の研究業績

八杉は体系的なロシア語教授法の確立を進めます。東京外国語学校におけるロシア語教育ではグレーボフ(現茨城県)著『西語文法』(1898年出版)が用いられていました。八杉はこのグレーボフや西欧のロシア語教科書を参考に、この10数年にわたる教育実践を踏まえたロシア語教科書として『西語文法』(大倉書店、1916年)を著します。この教科書は戦前戦後を通じて、入門書として広く使用されました。

また辞書の編纂にも尽力し、1919年には同僚であった鈴木武平らと共同してアレクサンドロフの『西語辞書』を和訳し、『新辞書』を出版しました。その後、1935年に出版した『若狭語辞書』は、見出し語・和文も豊富で出版後20余年で81,000部以上となるなど、ロシア語学習・研究には欠かせない辞書となりました。

八杉は1937年停年退職すると、『文部省官制辞書』/教育二部シカ労働者用として『東京外国語学校名譽教授』の名称を授けられます。戦後の1950年に日本『ロシア学協会』が設立されると、八杉は会長に推され、ロシア語の普及やソビエト研究の発展に貢献しました。

八杉は80歳を越えて、なお著書執筆に尽力し、1960年代には『若狭ロシア語辞書』を出版します。近年には朝日新聞社より朝日文化賞を、1964年にはソビエト連邦レニングラード大学より名誉博士の称号を受け、1965年にはロシア語研究の進展に寄与した功績により『若狭語辞書』が著者として1966年2月、最晩年のため漢語で死去しました。

『西語辞書』編纂者のための備忘録として使用したノート

1916年ロシア語学協会写真 前列右から八杉貞利、鈴木武平、トドロヴィッチ

『西語辞書』編纂者のための備忘録として使用したノート

2 八杉貞利資料群について

本資料群は、八杉貞利が東京外国語学校において教鞭を執っていた1908年から没年の前年となる1965年までの日記帳や、講義ノート・近影写真等の計64点で構成されています。

(1) 八杉貞利の日記について

八杉は、日々丹念に欠かさず日記をつけていました。資料群には1908年から1965年までの日記(一部欠損)が含まれており、八杉が内外の出来事への評価や、ロシア・満蒙等の関係者との交流も記載されており、当時の国際関係や関係者の交流を知るうえに貴重な資料となっています。

八杉の教え子である和久利智一によれば、「先生は、きわめてきょうめんなご性格で、日記も少年時代から晩年の半生ぐらひまで、一日として欠かされることがなかった(『ぼろしや路』4頁)とされ、日記帳は明治から昭和にかけての知識人が見た日本を伝える記録でもあります。八杉の日記については既に雑誌・書籍等で紹介されているものも多数存在します。例えば、東京外国語学校教職時代の、

ロシア・ソ連に渡航した記録は、「当時のロシアおよび日本の社会事情を伝える点で社会的意義あるもの」として、八杉の教え子である和久利智一の監修のもと、「しや路」昭和42年6月30日、図書新聞社として刊行されました。

渡航記の内容は日記に書かれていませんが、渡航前後の日記からは、大正・昭和初期における旅支度の苦労が伺えます。また、八杉が17歳の時(1896年)に親津津和野を訪れた際、小さな手帳に記した日記が死後1周年を記念して「登山日記」(1967年2月)として出版されたほか、帝国大学時代の生活が『蘭学日記』という名の手帳5冊にまとめられ、その一部が雑誌『文学』(1966年4月号)で紹介されています。

(2) 八杉日記に見る東京外国語学校

① 八杉貞利 日記 1909.4.14

「トドロヴィチ氏の到着」

1909年から1940年の31年間に亘り、東京外国語学校でロシア語教育にあたったドシャン・ニコラエヴィチ・トドロヴィチは、ベオグラード生まれのセルビア人で八杉が招聘した外国人教師でした。八杉の日記によると、1909年4月13日、八杉は教習準備中に到着したトドロヴィチより電報を受け取り、翌日彼を新橋まで迎えに行きました。八杉は「夫婿と小児四人には少々驚きたり、本人は人の極めて良好そう」と、その第一印象を記述しています。



ドシャン・ニコラエヴィチ・トドロヴィチ(1912年画)



3

② 八杉貞利 日記 1917.3.17

「ロシア革命」

八杉日記には、第一次世界大戦やロシア革命など、ロシア情勢への言及が多数確認できます。1917年、ロシア革命の動向が日本に伝えられてからは、ロシアの専門家として、新聞雑誌記者からの取材も多かったようで、3月17日付の日記にはロシアの新政府の閣僚の名前が記されるだけでなく、「閣議改選のために新聞雑誌記者等来り口取り、大部分は撃退す」と取材の多さに不快感を示す記述もあります。



③ 八杉貞利 日記 1919.6.23

「シベリア出兵への生徒軍事通訳派遣の中止」

東京外国語学校は日露戦争時に陸海軍より露清通訳の派遣依頼を受け、軍事通訳養成に携わりました。八杉日記によると、1919年のシベリア出兵に際しても「陸軍省より照会につき露語生数名を在学のまゝ陸軍通訳とし西伯利にやる可きにつき封鎖」があったそうです。しかし、この時、八杉は可を主張したそうですが不賛成が多く、此内に陸軍省より中止の旨申入りしても此の議も中止したそうです。



4

④ 八杉貞利 日記 1919.9.5

「バイカル修学旅行の報告」

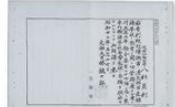
1919年7月9日-8月31日に実施されたバイカル修学旅行後の9月5日、教習会において旅行の報告が実施されました。八杉は旅先で病気になる者が多く、また卒業生への訪問連絡が徹底されていなかったことについて、旅行の教習として、「大旅行出発前、健康診断の必要、所在卒業生に通知の必要」と報告しています。



⑤ 八杉貞利 日記 1937.5.27

「名誉教授の辞令」

八杉は1945年まで非常勤講師として東京外国語学校に在籍しますが、1937年3月教授の職を停年退職します。同年多年に亘る八杉の学校への貢献を讃えるため、東京外国語学校名誉教授の称号が与えられます。しかし、5月27日の日記によると「本日やつと名誉教授辞令受領す。五月二十一日附にて、印形一つもなき無条件に貰きたり」とあり、同辞令を反映して「名誉教授」の辞令が随来であったことが伺えます。



公文書「八杉貞利東京外国語学校名誉教授/名刺フタケル/件昭和12年5月27日」(国立公文書館所蔵)



⑤ 八杉貞利 日記 1936.2.26

「大事件の日 ニ・二六事件」

1936年2月26日-29日にかけて陸軍青年将校らが政府要人を殺害し、永田町・霞が関一帯を占拠した「二・二六事件」について、日記には「大事件の日」と記載され、その状況が明瞭に記述されています。当時、東京外国語学校の校舎は皇宮御用掛の敷地内行幸町に位置しており、騒乱は授業にも影響を与えました。28日には校内で「用心二萬一」の増会の決議を賛成し、29日には戸沢正保校長より八杉に「いよいよ『武力使用地』のため本日始業中止」とする旨電報で連絡があったことが記述されています。



コラム 「東京外国語大学附属図書館 八杉文庫」

八杉貞利の蔵書は、その後東京外国語大学に寄贈され、現在「八杉文庫」として図書館に収められています。「八杉文庫目録」(1973年10月、東京外国語大学附属図書館発行)には八杉の教え子で当時東京外国語学校の図書館長を務めた和久利智一の序文があり、寄贈の経緯が以下のように紹介されています。

「先生の逝去後、その新蔵書約941冊がご遺族から本学図書館に寄贈された。先生の御遺書は、太平洋戦争末期、麻布区町の邸宅に置かれたものももちろん、八王子に避難されたものまでも空襲によって焼失した。御寄贈を受けたのは、主として北條井沢に避難されていたものであるが、先生が戦後入手されたものも相当数に上っている。

本図書館で、これを別冊として「八杉文庫」とし、先生の御業績と、本学と先生との深い由縁を永久に記念することとした。」



5

6

東京外国語大学所蔵「八杉貞利ロシア関係資料群」
デジタルアーカイブ化事業報告書
2026年3月31日発行
編集・発行 東京外国語大学文書館
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
TEL 042-330-5842
E-mail tufsarchives@tufs.ac.jp
URL <http://www.tufs.ac.jp/common/archives/index.html>
